

る合意が成立したことにほかならない。このあと、高橋鑑種は、大友氏から段銭の徴収を命ぜられている一方で、長門の内藤隆春と親しく情報交換をしており、毛利方として行動した。

なお、高橋鑑種の家臣北原・中野某は、大友宗麟に懇願して筑前に高橋家の再興を許され、立花城督吉弘鑑理の二男弥七郎を養子として、高橋鎮種（のち紹連）と称させ岩屋城・宝満城に入った。吉弘鑑理が間もなく老死すると、大友家の老忠臣戸次鑑連が立花城督を命ぜられ、立花道雪と称した。

そのころ、毛利氏は、鳥取・岡山方面の経略に意を注ぎ、織田信長と対立するようになっていたから、九州は比較的平穏で、叛服を繰り返しながら成長してきた肥前の龍造寺隆信の討伐に出兵する程度の動きで、大友宗麟の北部九州支配が約一〇年間つづいた。

七 大友氏の衰退と蓑島の戦い

大友氏の全盛の転機となったのが、天正六年（一五七八）十月の日向高城での大敗である。日向において伊東義祐と土持親成の対立に介入した大友氏は、土持氏を支援する島津氏の大軍と衝突することになり、不用意な作戦が裏目に出て大敗を喫し、多くの家臣を失ってしまった。

秋月種実の発展

大友家重臣多数の戦死と、宗麟のキリスト教信仰に批判的な重臣たちの非協力で、大友家が弱体化したとみてとった豊筑の国人たちは、またもや毛利氏や龍造寺氏と連絡を取り合って、大友氏の支配から独立しようという動きを始める。その筆頭が筑前の秋月種実であり、これと連携して動くのが、筑紫・宗像・



秋月種実の花押

麻生・長野・小倉高橋・野仲鎮兼・時枝鎮継らである。これより前、毛利輝元は柳沢元政へ「去年、あなたの薩州へ下向の首尾によって、豊薩の対立が戦争に発展することになった。豊筑の毛利方の武士との関係もあるのです、薩州の動きに合わせて毛利氏も九州へ軍勢を動かすつもりである」（『柳沢』）と述べており、織田信長も大友宗麟、毛利輝元、島津義久の連合が形成される中で、豊筑の武士で毛利、島津に心を寄せながら日向に出陣させられた武士が多かったことも、敗軍につながったであろうと思われる。

永禄十二年（一五六九）閏五月、筑前立花城が毛利氏に占領され、高橋鑑種の籠城する宝満城へ、中国衆二〇〇〇人の増援軍が送り込まれたころ、豊前では、企救・田川・京都・仲津の西部四郡が毛利氏の支配下に入ったが、同年十月の立花城撤兵で、毛利氏は松山城をも放棄し、門司城と企救郡を維持するのみとなり、やがて小倉に高橋鑑種入道宗仙を住まわせた。

大友氏と宇佐宮の対立 宇佐郡では、大友氏の社奉行奈多鑑基・鎮基父子（国東郡安芸郷奈多八幡社司で、宗麟の正室の宇佐一族）と宇

佐大宮司ほかの社官衆との対立が深刻となり、宇佐宮の宮成・益永・時枝・橋津氏は毛利氏や秋月氏と連絡をとって大友氏に敵対するようになる。

隣の下毛郡では、二〇余年前から叛服常でない野仲鎮兼が旧領回復を図って、山国郷より平野部に出てきて、田原紹忍（親賢）指揮下にある大畑城（中津市加来）・福島城・田島崎城（三光村成恒）を包囲し、数十

回も合戦を繰り返した。

天正七年正月以前に、秋月種実(あきづきむねね)は毛利氏へ一味したいと申し入れて、(「萩藩閩閩録」巻七)。この時、毛利氏は秋月種実(あきづきむねね)に豊筑の切り取りを許したものと考えられる。

表島の戦い

そのころ、杉重良(しげりょう)の事件が表島(うらしま)で起こった。重良は豊前守護代杉伯耆守重輔(しげのすけ)の子である。父重輔(しげのすけ)が内藤隆世(うちねりよ)と対立して襲撃され、山口を焼亡させる合戦のすえ滅亡したとき四歳で、松千代丸(まつくちのたま)と称し、のち門司城合戦のころ、杉因幡守隆哉(しげのたけ)・天野隆重(あまのりゅうじゅう)等と共に、松山城に籠城し、立花城合戦のころも松山に籠城した。(「杉文書」四・六号)。

天正七年正月、杉重良(しげりょう)は毛利家を背き、田原紹忍(たはらのしうにん)を頼み、大友家に仕えたいと申し入れ、手勢二〇〇、雑兵二〇〇〇余(あま)をもって渡海し、表島に着岸した。これを高橋宗仙(たかはしむねせん)が兵六〇〇〇余(あま)をもって攻め戦ったあと、重良(しげりょう)が椎田(しいだ)へ上陸したところ、これを待ち伏せしていた宗仙軍(むねせんぐん)が包囲して自刃させた。『大友興廃記』(おほともきうはい)は記している。天正七年三月四日のこと、重良(しげりょう)は二十五歳であった。高橋宗仙(たかはしむねせん)もこの年四月二十四日病死したという。

なお、杉重良(しげりょう)の子松千代丸(まつくちのたま)は、母と福原貞俊(ふくはらさだとし)の度々の歎願によって、杉家断絶(しげかだんたつ)を免れている。(「杉文書」)。

『大友家文書録』(おほともかみんぶろく)の次の史料は、この事件の背後に、もっと複雑な情勢(せいせい)が絡んで(かか)っていたことを語っている。

(田原親忠) 表島(うらしま)にいたり、宗龜(むねかめ)人数差渡(にんごうさわたり)され、杉重良(しげりょう)と申し合わされ、前廿八大橋表(まへにやふはちおほはしうら)において勝利(しょうり)を得らるの由承(よしかた)り候、各軍(かくぐん)芳(よし)の次第(しだい)、申すに及ばず候、然(しか)る所(ところ)、高橋(たかはし)・長野(ながの)申組(まのくみ)、右嶋(みぎしま)取詰(とりづめ)めるにより、毎日(まいにち)防戦(ぼうせん)を遂げ、敵数(てきかず)百人討(と)ち

ち果(は)し候刻(とき)、宗龜(むねかめ)家中(うち)余儀(あま)無(な)き衆(しゆ)戦死(せんじ)の様(よう)、その間(ま)候、(中略) 万(ま)一(いつ)、表島(うらしま)仕合(しあ)無(な)く候(とき)は、秋月(あきづき)が事(こと)、還(かへ)て宗龜(むねかめ)入魂(にんこん)の儀(ぎ)もこれ有(あ)るべく候(とき)か、その故(ゆゑ)は、(秋月)種実(むねね)の無思慮(むしりよ)深重(しんじゅう)候(とき)とも、宗龜(むねかめ)、氣遣(きぢ)いに及(およ)ぶに於(お)いては、種実(むねね)、内儀(うちぎ)としては、歎息(なげき)有(あ)るべく候(とき)や、調略(てうりやく)以下(以下)も折目(せりめ)をもつて成就(じゆうじゆ)候事(とき)、新(あらた)しからず候(とき)の条(じょう)、差置(さしお)かれず、その御心懸(ごこころか)専(せん)一(いつ)に候、(下略) (原漢文)

これによると、表島(うらしま)の合戦(くわせん)は、妙見城督(たみまきじやうとく)田原紹忍(たはらのしうにん)親賢(しんけん)ではなく、田原惣領家(たはらのそうりやうけ)の親宏(しんこう)入道(にんどう)宗龜(むねかめ)が杉重良(しげりょう)と連絡(れんらく)して表島(うらしま)に籠城(りゆうじやう)し、二月二十八日(にがつにじゅうはちにち)には行橋(ゆきはし)の合戦(くわせん)で勝利(しょうり)を収(と)めたが、高橋鑑種(たかはしのかんしゆ)・長野助守軍(ながのすけもりぐん)に攻められ、敵数(てきかず)百人(ひゃくにん)を戦死(せんじ)させたものの、味方(あじ)も多大(たいた)の損害(そんがい)を被(あ)つたのは、合戦(くわせん)のならい、やむをえないことである。秋月種実(あきづきむねね)は、宗龜(むねかめ)の婿(むこ)であり、宗龜(むねかめ)の養子(やしん)田原親貫(たはらのしんくわん)は種実(むねね)の弟(あに)長野種信(ながのむねのぶ)の子(こ)であるという関係(かんけい)から、種実(むねね)を諫(いさ)めて、大友家(おほともけ)と和平(へいへい)を保(たも)つよう調略(てうりやく)してもらいたいとある。

田原宗龜の逆心

田原宗龜(たはらのむねかめ)は、日向高城(ひゅうがたかじやう)の大敗(たいばい)後(ご)、大友家(おほともけ)加判(かはん)衆(しゆ)となることを求められたが、突然(とつぜん)、国東(くにとう)に帰(かへ)り、田原紹忍(たはらのしうにん)へ与(よ)えられていた旧領(きうりやう)の返還(へんげん)を要求(ようきう)して叛意(はんい)を示(し)した。大友宗麟(おほともむねりん)は驚愕(きやうがく)して、旧領返還(きうりやうへんげん)の代わり(しろか)りに宗麟(むねりん)の子(こ)林新九郎(はやししんくさう)親家(しんけ)を田原家(たはらのけ)へ養子(やしん)として迎(むか)えること、宗龜(むねかめ)の忠誠(あかし)の証(あかし)として、豊前中部(ぶんぜんちゅうぶ)において一行(いっぎやう)を企(たく)てること(こと)が密約(ひそやく)されたのである。

杉重良(しげりょう)は、秋月種実(あきづきむねね)が豊前(ぶんぜん)の切り取り(きりとり)を毛利氏(もうりうぢ)に承認(しんにん)され、田河(たが)・京都郡(きよと郡)に侵入(しんにん)してきたとき、松山籠城(まつかのりゆうじやう)時代(じだい)に与(よ)えられた二郡(ふたぐん)京都郡(きよと郡)と仲津郡(なかつぐん)カ)



田原親宏の花押

(「伊香賀」)を要求(ようきう)して、秋月氏(あきづきうぢ)に抗議(かうぎ)し、また、大友氏(おほともうぢ)からこの二郡(ふたぐん)を与(よ)えられていた長野三河守助守(ながのさんごしゆすけ)が毛利方(もうりうかた)へ寝返(ねがへ)ったため、田原宗龜(たはらのむねかめ)の調略(てうりやく)によって、表島(うらしま)渡

海となったものであろう。

この年、彦山座主舜有も秋月種実くみに与し、一族の政所坊連長と家臣伊良原因幡守を人質として秋月に差し出したという。

彦山炎上

天正九年（一五八二）十月、秋月勢を追って豊後勢が彦山を包囲した。別所口・玉屋口・落合表等で戦闘が行われたあと、十一月二十一日、一山悉く焼き打ちされた。この二日前には、大友国家に敵対する宇佐宮が国東・速見郡衆に包囲されて焼き打ちされている。大友国家瓦解の危機に立たされて、古代宗教勢力を保護する余裕がなくなったと見るべきか、宗麟がキリスト教に傾斜して、伝統的宗教を積極的に排除するようになったのであろうか。奇しくも、この年八月、織田信長が高野山の聖一〇〇〇余人を斬っている。
京都・仲津 天正七年九月二十八日付の『長野助守覚書』（『神代長』
『野文書』）
郡の情勢 を示して、このころの豊前の情勢を考えてみよう。

覚

- 一 城井鎮房、表し申さるの事
 - 一 仲津郡の儀、御分別を成され、忝かたじけなきの事
 - 一 香春両岳、慮外の事
 - 一 豊筑立柄の事、付、松山の普請、御延引の事
 - 一 愚息少輔五郎進退（統重カ）之事
 - 一 助守の人質、門司御城堪忍之事、付、質柄の事
 - 一 旧領京都郡ならび仲津郡、御証判頂戴の事
- 以上

天正七年
九月廿八日

助守（花押）

（原漢文）

これは、長野三河守助守が、毛利方へ簡条書きにして、使者に申し合めて要望したものであろう。このころ、城井鎮房は毛利方となつてお



田原紹忍が拠った妙見岳城址（宇佐郡院内町より）



長野三河守助守の花押

と、高橋宗仙の死後、養子元種（秋月種実の弟という）と長野助守（子息統重カ）とが不仲となつており、長野方が松山城の奪取を企んでいて、大友方へ寝返るのではないかと心配されている。

り、長野助守の旧領を返還したこと、助守へ仲津一郡を毛利方が与えたこと、香春岳の一の岳・二の岳が大友方に占領されたこと、豊筑の情勢から、松山城の普請を延期したこと、助守の子五郎の取り扱ひのお願ひ、門司城に預けている人質について、大友氏から与えられた京都・仲津二郡の安堵を希望するという意味だと考えられる。
天正九年十月二十八日付の『毛利伊勢文書』には、
長野の事、松山取付るの由候、不審無きにあらず候、高橋と内々宿意共候や、それにつき、長野、こちらに對し別儀無く候はば、（内藤）隆春にこれを仰せ談ぜらる。
（原漢文）

高橋鑑種の養子元種は秋月種実の弟であり、同じく種実の弟長野筑後守種信が暗殺された跡を嗣いだ三河守助守は企救郡三岳近辺の旧領回復を狙い、高橋元種は秋月種実と連携して豊前中部・東部への進出を狙ったから、互いに対立するようになったのであろう。

長野氏は平安末期以来、在庁官人として企救郡に勢力を扶植した名族であったが、長野筑後守（種信）が、大友氏に表裏を繰り返しているうちに、到津氏被官に暗殺され、残された長野兵部少輔弘勝は毛利方に攻められて戦死し、三河守助守は豊後へ亡命し、立花城合戦後は、大友氏から仲津・京都二郡を与えられて馬岳に配置されたらしい。

西郷氏の滅亡

天正八年四月十八日、西郷頼明が大坂山に籠城中、大友方が田川の合戦に敗れて、中津川に退却したあと、秋月・長野の軍に攻められ城を落ちて行く途中を襲われて討ち死にしたという。後述するが、当時、大友氏は家老田北紹鉄と田原親貫の挙兵で、豊後の外へ出張する余裕はなかったから、天正八年の西郷氏の滅亡が正しいならば、長野助守に本領を侵犯されて対立するに至ったと考えるべきであろう。なお『太宰管内志』は『中津郡古城記略』に大村不動が岳は西郷刑部左衛門高頼（隆）という者が居り、大坂村興正寺参詣の時、長野三郎左衛門尉祐盛が押し寄せ討ち取った。高頼の墓は興正寺にあると記している。この記事を信じるならば、天正六年以前の出来事ではなからうか。

田原親貫の挙兵

天正八年正月、豊後では安岐城（東国東郡安岐町）で田原親貫が挙兵した。親貫はやがて国境の鞍懸城（豊後高田市佐野）へ移動し、十月まで抵抗を続けた。田原親貫は秋月種実の弟長野種信の子で、田原親宏に男子がなかったため養子となつて

いた。先述したように、田原親宏は天正六年の暮れ、国東の旧領返還を要求して挙兵する構えをみせて、宗麟と取引し、宗麟の子親家を家督に迎える約束を交わして、杉重良を支援して、高橋鑑種・長野助守と戦い、秋月種実とは絶縁する態度を示したから、秋月種実は、天正七年三月十九日、田原宗龜へ

我等が事、聊も以つて別条の意、少もこれ無く候、重ねて承りまじく候、恐れながら、御家の儀、追つて御後悔無き様、御才覚この時に候、（以下略）
漢文、「種用広氏文書」

と、恨みとも、おどしともとれる書状を送っている。

田原家にとつて邪魔な存在となつた親貫は、長野・高橋・秋月・毛利氏と連絡をとつて挙兵した。

西目衆の下毛・ 豊前では、鞍懸城救援のため、西部より東部四郡

宇佐郡 侵入 へ侵入し、各地で合戦が繰り広げられた。

天正八年二月の『立花道雪大槪文』によると、秋月種実は大友氏の無道十数か条を書き立てて近国に触れ回り、挙兵を呼びかけると指摘しており、三月二十八日、中津川（中津市）に「西目衆」が現れて交戦し、八月から九月にかけて、下毛郡や宇佐郡の元重・高家・四日市・矢部の切寄（きりよ）に押し懸け、九月六日には、豊後高田の千部口（ちべぐち）にも侵入し交戦した。『佐田文書』に「昨日（九月）八日、城井・長野以下の悪党、赤尾三河入道宅所へ取懸け、村中放火せしめ、切寄に詰寄り候といえども、堅固の格護をもつて敵数多仕付け分捕高名す」（原護）とあり、このころ、下毛郡の野仲鎮兼、宇佐郡の宮成・益永・辛嶋氏も西目方に与同した。先述したように、城井鎮房・長野助守が秋月方として行動している。大友方は妙見岳の防備を堅固にし、城督田原紹忍は味方の武士たちが

ら人質を取り置き、四日市・福島・賀来等の切寄に豊後衆を檢使として勤番させて、東部四郡の維持に懸命となった。

天正八年十月、鞍懸城を落ちた田原親貫は、豊前善光寺付近の高家村に蟄居していたが、時枝氏に討伐させたという。翌年十一月には、宇佐宮や彦山の焼き打ちが行われたが、このころ、下毛郡・宇佐郡が戦場となり、大友方に降っていた野仲鎮兼は、玖珠郡・由布院からの加勢が到達する前に秋月方に屈した。



障子岳城址より香春岳を望む

長野式部大輔統重（助守の子息カ）は、十一月二十八日の下毛郡築地

切寄（中津市福島）・上毛

郡多布原（太平村）・宇佐

郡大根川等に打ち入った

らしく、長野河内守・黒

水加賀守・神代駿河守・

恒吉左京亮・花田右京

進・小袋次助・池尻佐渡

守・安東内膳亮・後藤勘

解由允・樋口对馬守・渡

辺大学亮等の活躍を注進

し、毛利輝元の証判を得

ている（『神代長』
『野文書』）。

高橋元種の成長

天正

十年七月以降、上毛郡の
広津氏、下毛郡の成恒

氏・福島氏、宇佐郡の萩原氏などが、高橋元種・野仲鎮兼に降り、所領の安堵を願い、妙見岳城督田原紹忍・親盛父子は籠城して防戦に追われるようになって、大友義統へ豊後衆の派遣を請う有り様となった。

天正十一年七月、大友方より豊前方面への反撃のため、玖珠郡衆や肥後小国・阿蘇衆が動員され、九月二十四日、広津治部少輔の抱城である万田切寄（中津市）を攻撃して、城督広津治部少輔以下を討ち果たし、十月八日、佐野切寄（宇佐市）では激戦となって双方多数の死傷者を出した。さらに十月十六日、是則切寄（中津市）を一気に攻略して、豊前東部二郡の形勢を挽回した。

天正十三年、宇佐大宮司宮成氏及び時枝氏は、島津氏に出陣を要請し、好返答を得た。しかし、島津勢の出陣は天正十四年七月になり、筑前岩屋・宝満岳に籠る高橋紹運を攻め、さらに立花城の立花統虎を包囲



野仲鎮兼の長岩城址（耶馬溪町津民）

